

令和3年度 保護者向け教育講演会 記録

- 1 日時 令和3年10月2日(土) 14:00~16:00
- 2 講師 埼玉県立大学・大学院教授 東宏行氏
- 3 演題 不登校児童生徒への関わり方

4 講演記録

(1) はじめにー現場で関わりながら思うことー

近年、不登校児童生徒数は増加傾向にあり、特に小学生の不登校の増加が目立つ。それに伴い、国も不登校に関する法整備を進めている。そんな中で、不登校児童生徒への支援に必要なことは、不登校時の経験を、自立のための経験にすることである。関わり方として、「自立への支援」と「促すことと待つことのバランスをとること」が大切である。

(2) コロナ禍の中で不登校と向き合う

子ども達の感じ方には幅があり、イライラして攻撃的になったり、ボーっとして意欲が減退したりと両極端である。コロナ休校がきっかけとなり、登校しやすくなった子もいれば、学校に行くのが憂鬱になった子もいる。また、感染防止の取り組みや気遣いが長期化し、心身の不調を訴える相談が増加している。ネット環境が整備され、「家庭内で勉強もできるし、ネット上で友達もできるのになぜ学校に行かなくてはいけないのか」と疑問をもつ子どもも増えている。家から離れた場所で学び、生活をするものの意味や意義を再確認したい。

不登校の子ども達が考えていること(常に変化しているのが当たり前)

(3) 子ども達が考えていることに合わせた関係づくりが基本

関わり方は不登校の時期と状況に応じて変化する。例えば小学生低学年であればはっきりとした行動目標をもたせること、高学年であれば本人の意思を尊重すること、中学生であれば選択肢を与えることが重要である。また、進学、進級、新学期、行事・試験など学校暦に合わせて子どもへの働きかけの方法を変える必要がある。働きかけにはタイミングが重要であり、不登校の期間や状況によって支援の方法は少しずつ違う。

(4) 子ども達の心情の変化に合わせた関わり方

- ① 不登校初期の子どもは「学校には行かなくちゃ、行けるのなら行きたい」と思っている。→不必要に気持ちを聞かない。「どういうつもり?」「何を考えているの?」といった抽象的な質問は控えた方がよい。
- ② 原因や要因は複合的なことが多く、自分でも整理できない。
→原因や理由をしつこく聞かない。話しのきっかけになる、「何かあった?」程度にする。
- ③ 周囲の反応に敏感になり、期待に応えられない自分に自己肯定感をもてないでいる。
→「自分のため」より、誰かのために、という良心へ働きかける。
- ④ 全てを理解されることは嫌だけれど、知っていてほしいこともある。
→理解・共感するより大切な、見捨てない関係(例えば家庭訪問など)。
- ⑤ 周囲に遠慮し、迷惑をかけたくないという気持ちになりやすい
→周りの大人が「あなたのせいで…」というメッセージは避ける。
- ⑥ 友人や同級生の支えは、かなり強力な支援になることもあるが、戸惑いや怖さも感じる。

- 大人が友達をつくってあげることはできない（友達をつくりやすい環境づくりは可能）。
- ⑦ 答えや返事を求める関わりに戸惑いや怖さを感じることが多い。
→本人が決めること・ものを決め、すぐに答えを求めない。本人が考える時間をつくる。
- ⑧ 信頼できる大人・友人との関係を待っている。
→戦略的でない、自然体の関わりを心がける。過剰に計画的な関わりは、本人も気づく。
- ⑨ 転校（転編入）による解決は、リスタートの方法になるが、本人の不安は想像以上に大きい。→簡単に代替りの場所（転校・適応指導教室など）を提案しない。期間を置いて、本人の気持ちの動きに合わせて提案する。

保護者にできること1 ー待ち方を工夫するー

(5) 「待ちましよう＝何もしない」ではない

待つということとは、待機する（促しや刺激の時を待つ）ということ。待つ間には具体的な支援の形として「トライアングルアプローチ」が必要である。まずは、「生活」を刺激する。生活の中で準備・計画をする経験を積ませたり、料理など何かを真似て模倣する力をつけたりする。とにかく集中して物事に取り組む時間をつくる。次に、「関係」を刺激する。家族の中で共通の趣味を見つけたり、一緒に外出をしたりする機会をつくる。この2つの刺激をベースにすることで、段階的に登校刺激を与えることができる。

保護者にできること2 ー3つのポイントー

(6) プロセスとタイミング・見極め方・中間的居場所

- ① 「待ち」「促し」「働きかけ」のプロセスとタイミングは、すぐに子どもに求めるとプレッシャーになるので、時間的な余裕をもって1週間程度前に問いかけをし、本人に考える時間を与えることが大切。そして、前日等直前に具体的な働きかけを行うとよい。
- ② 登校をするかしないかの見極め方は、本人をよく見て関わるのがポイント。身体症状が出ていないか、保健室登校や放課後登校等の代替案を提示した際の反応を見て判断する。
- ③ 学校と家族の間の橋渡しとなる中間的居場所や中間的活動をつくることで、親にとっては子どもと離れる機会や考える時間を確保することができる。子どもにとっては、親と離れる機会を確保したり、知り合った先輩がモデルになり、進路選択などがより具体的になったりするなどの効果がある。また、教師や支援者にとっても本人と会うチャンスが広がり、本人を見捨てていないというメッセージを送ることができる。

(7) おわりにー不登校の子どもへの支援で大切なことー

- ① 保護者自身が、落ち着いて支援するためのコツを見つける。プロセス（長い目で見える）、イメージ（将来に肯定的なイメージを描いてみる）、システム（一人で考えない）、インターバル（子どものことを考えない日や時間を意識的につくる）等がコツになる。
- ② 忘れやすいけれど最も大切な考え方は現状維持。今できていることを続けることが最も大切なことである。
- ③ 子どもへの関わり方で最も大切なことは「さりげない関わり」である。親が子どもに自然体で関わることで、よい影響が出ることがある。
- ④ 上手な支援とは、やってみてそれを修正していくことである。子どもは一人一人違う。また、同じ子どもでもタイミングによって気持ちは変化している。最適だと思う関わりを試行し、様子を観察して修正し、また試行するという循環型の関わりが上手な支援である。